福　岡　市　南　区

野　間　B　遺　跡

―第３次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第231集

１９９０

福岡市教育委員会

―序―

福岡市の南郊大橋・三宅地区は、幹線道路網の整備充実を機に一帯の宅地化が進み、開発によって影響を受ける遺跡も増加しています。

今回の野間Ｂ遺跡の調査も民間の宅地造成に伴うもので、弥生時代中期はじめ頃の竪穴住居址、土壙、溝が検出され、当時の福岡平野の集落実態を把握する上で大変重要な成果となりました。

つきましてはこの報告書が市域の文化財に対する御理解となるとともに学術的にも有効に活用されれば幸いです。

平成２年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　　佐　藤　善　郎

―れいげん―

本報告書は、1988年５月～６月に発掘調査を実施した、大和団地株式会社福岡支店による共同住宅建設に伴う福岡市南区野間Ｂ遺跡の第３次発掘調査報告書である。

遺構の呼称は、竪穴住居址→ＳＣ、土壙→ＳＸ、掘立柱建物→ＳＢ、溝→ＳＤとして番号を付した。

遺構・遺物の実測、および編集・執筆は横山がおこなった。

本文目次

第１章　はじめに

第２章　遺跡の立地と環境

第３章　調査の記録

１．ＳＣ01住居址　　２．ＳＣ02住居址

３．ＳＣ03住居址　　４．ＳＢ01掘立柱建物

５．ＳＸ01～03土壙　　６．ＳＤ01溝

７．表土出土の遺物

第４章　おわりに

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

1988年２月26日、大和団地株式会社福岡営業所より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、南区向野二丁目236番地内における埋蔵文化財の有無の事前審査願いが出された。

当該地は、1987年５月・10月に調査を行なった第１・２次調査区の北側に位置する数少ない、緑濃い丘陵の一角であった。

埋蔵文化財課では同年２月18日試掘調査を実施し、対象地の南半部に弥生時代中期の生活遺構を確認した。これ以降建設予定の共同住宅による影響を計ったが、現状での保存は困難と考えられるに至り、本調査の時期の協議に這入り、本調査についての受託契約を結んだ。

この結果1988年５月20日から本調査を開始した。

調査番号	８８１０	遺跡略号	ＮＯＢ	所在地	南区向野二丁目236
開発面積	1,468.07㎡	調査面積	330㎡	調査期間　1988年５月20日～同６月16日	

2．調査の組織と構成

調査委託　大和団地株式会社福岡支店

調査主体　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課
柳田純孝（課長）　飛高憲雄（第二係長）　松延好文（事務担当）
大庭康時・米倉秀紀（事前審査担当）
横山邦継（発掘調査担当）

整理作業　小森佐和子・土斐崎つや子

発掘作業員　大近麻子・桑野正子・西田幸子・西山秀子・廣瀬梓・藤友洋子・松浦ウメノ・山部増人・山本后代

なお発掘調査にかかる諸協議および現地での発掘作業での条件的整備等では以下の方々に大変な御協力をいただきました。記して感謝する次第であります。

福留茂樹（大和団地株式会社福岡支店建築課）、佐伯憲二（有限会社群設計工房所長）、牛島淳治（西松建設株式会社福岡出張所）（敬称略）

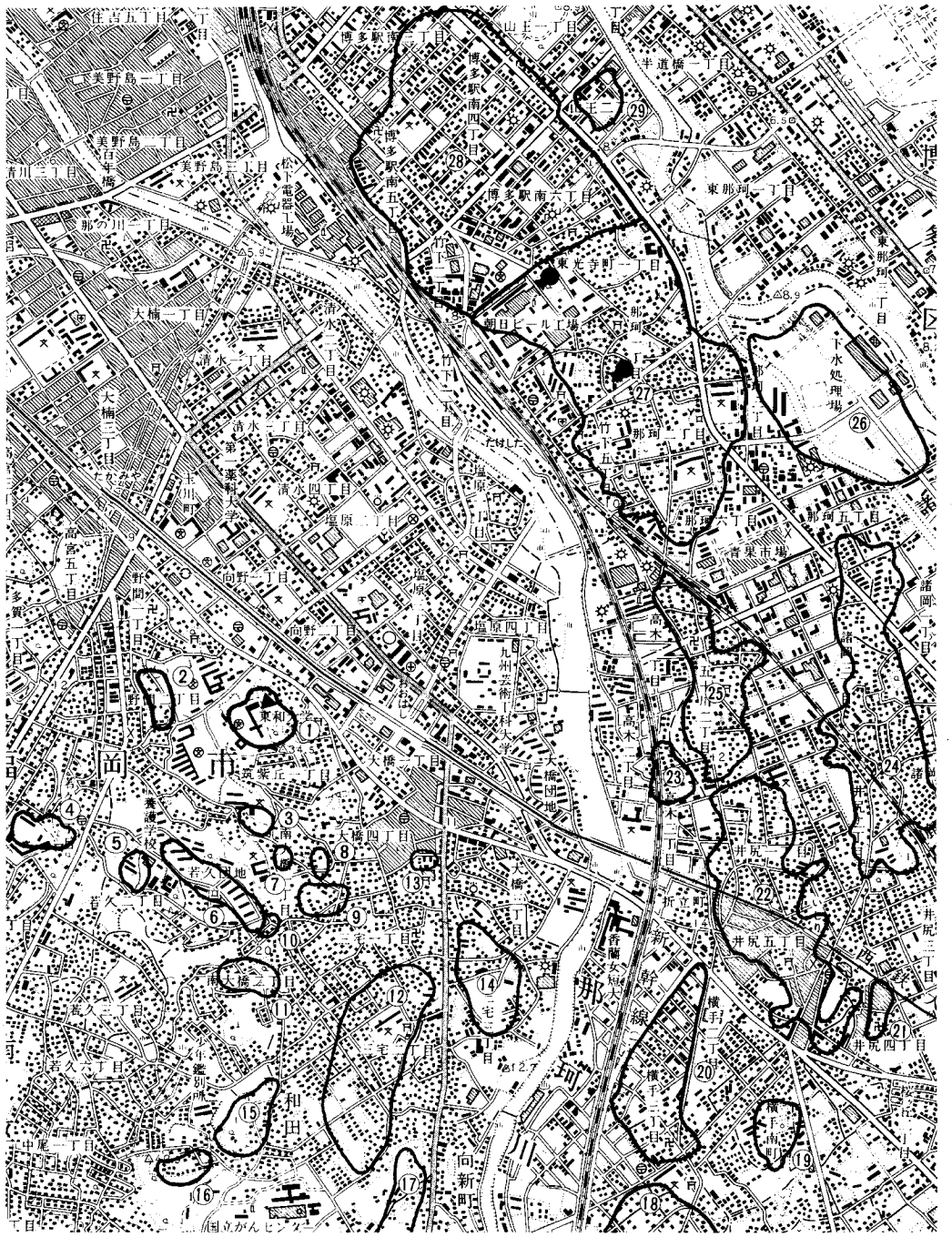


Fig.1 周辺遺跡分布図（1/2.5万）

1．野間Ｂ遺跡	2．野間Ａ遺跡	3．大橋Ａ遺跡	4．若久Ａ遺跡	5．若久Ｂ遺跡
6．大橋Ｂ遺跡	7．大橋Ｃ遺跡	8．大橋Ｄ遺跡	9．三宅Ａ遺跡群	10．三宅岩野瓦窯址
11．和田田蔵池遺跡	12．三宅Ｂ遺跡群	13．大橋Ｅ遺跡	14．三宅Ｃ遺跡群	15．和田Ａ遺跡群
16．和田Ｂ遺跡群	17．野多目Ａ遺跡群	18．曰佐遺跡群	19．寺島遺跡群	20．横手遺跡群
21．井尻Ｃ遺跡群	22．井尻Ｂ遺跡群	23．井尻Ａ遺跡群	24．諸岡Ａ遺跡群	25．五十川遺跡群
26．那珂深ヲサ遺跡	27．那珂遺跡群	28．比恵遺跡群	29．比恵甕棺遺跡	

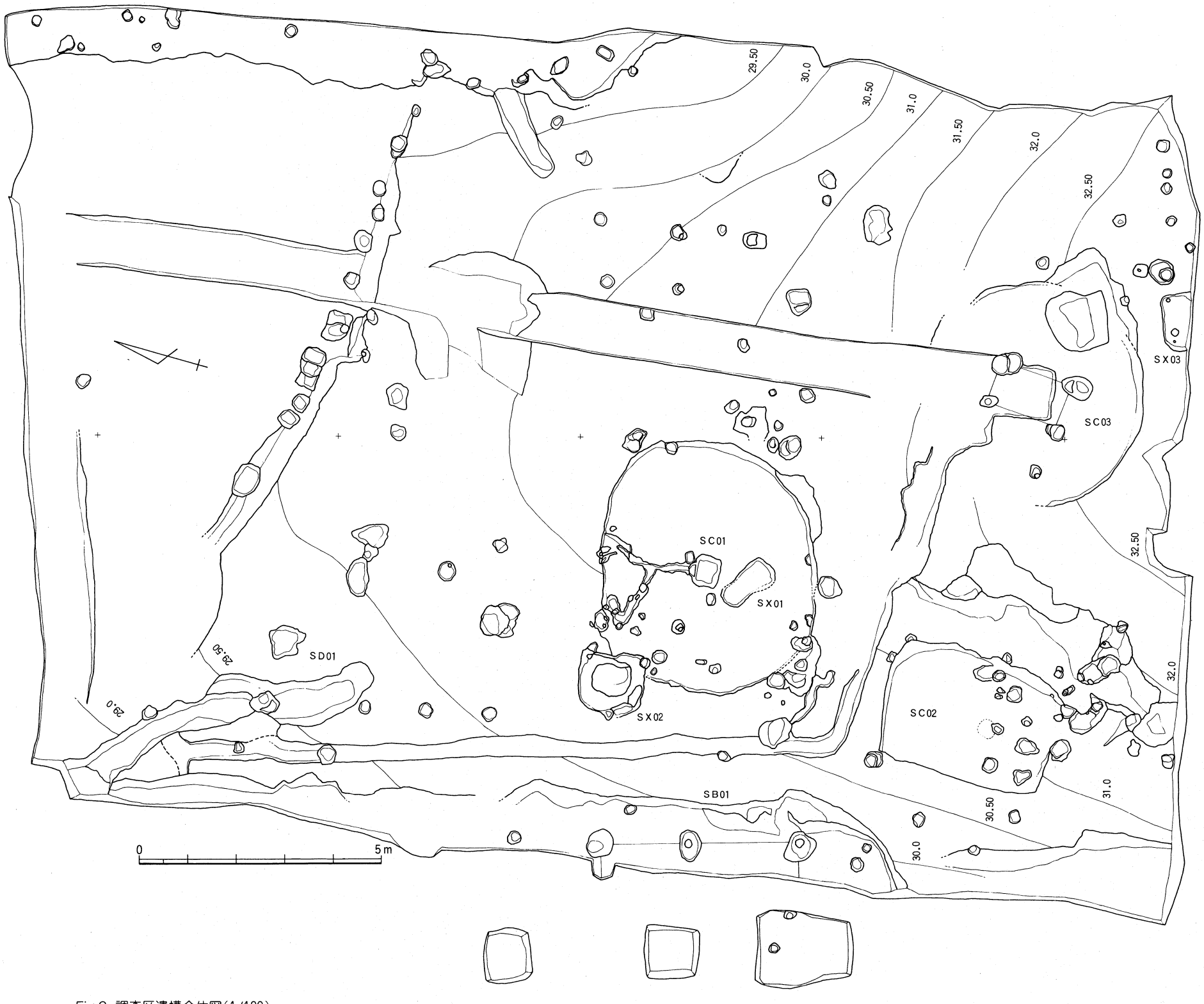


Fig.2 調査区遺構全体図(1/100)

第２章　遺跡の立地と環境

野間Ｂ遺跡は、福岡平野を北流して博多湾に注ぐ那珂川の中流域左岸一帯に残る標高30m前後の低丘陵の突端部に位置する。

遺跡周辺一帯は、市街地建物の高層化が急速度で進行しており、建替えと同時に周辺に点々と残る僅かな緑地が近代的な住宅地へと変えられ、遺跡は殆ど完全消滅に近い。

那珂川の両岸にひろがる各遺跡群のうち左岸のものは比較的早い時期に住宅開発の波を受け、実態の把握が困難な遺跡が多くある。

野間Ｂ遺跡は、これまで２回の発掘調査が1987年５月、同年10月に行なわれ、古墳２基（６世紀初頭・６世紀末）と弥生時代中期初頭の円形住居址１軒が見付かった。今回の第３次調査地点は、これらの北側に隣接するやせ尾根上にあたり、検出された遺構から第２次調査竪穴住居址とともに弥生時代中期前半の一集落をなすものと考えられる。

野間Ｂ遺跡周辺ではこれまで考古学的調査の行なわれた遺跡は少なく、僅かに三宅廃寺(Fig. 1.)、大橋Ｅ遺跡（弥生時代中期・中世の生活遺構）（同図13)、野多目Ａ遺跡群（縄文時代晩期末など）(同図17）等であるが、本遺跡の北西約１kmの高宮遺跡群（高宮八幡）出土の広形銅鉾・銅戈鋳型、野間門の浦出土の中細銅矛（東京国立博物館蔵)、筑紫丘高校所蔵の弥生中期前

Fig.3 第１～３次調査地点図(1/2000)

葉～末にかけての甕棺、前の大橋Ｅ遺跡第１次調査での銅剣鋳型の出土が知られており、過去的に失なわれたものが如何に多いかが知られるところである。

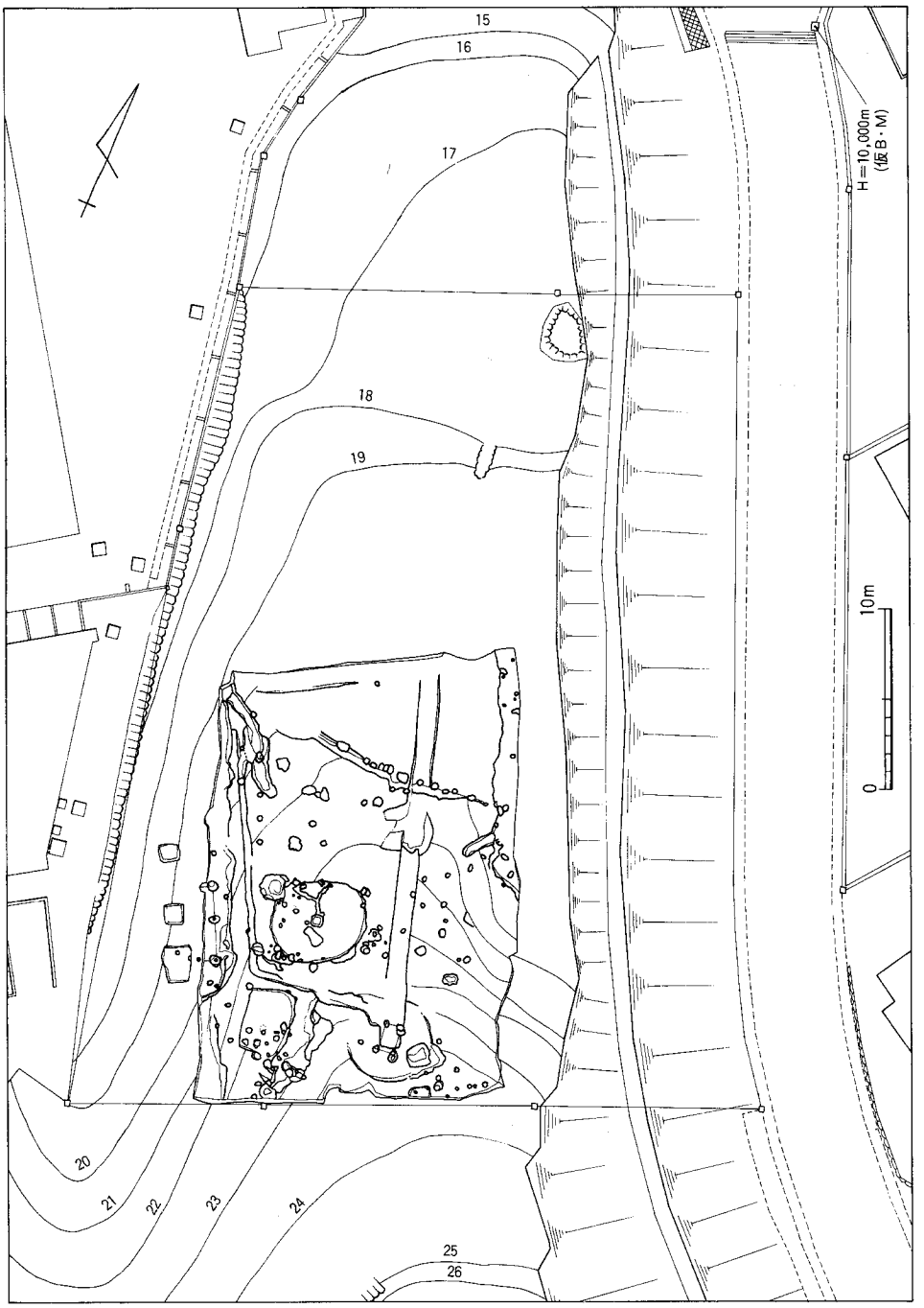


Fig.4 第３次調査地点図(1/500)

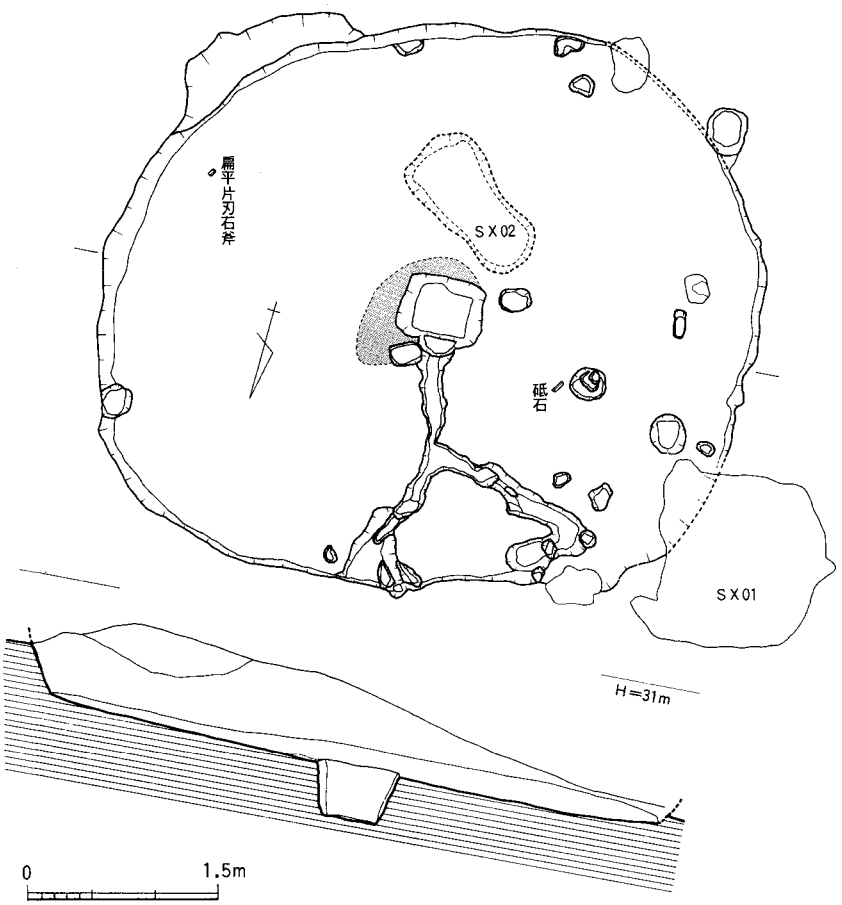


Fig.5 SC01住居址出土状況実測図(1/60)

野間B遺跡の東南4kmには奴国の中心地須玖岡本遺跡があり、那珂川を狭んで対峙する井尻遺跡群、諸岡遺跡群、更に市域では最大の那珂丘陵に展開する那珂・比恵遺跡群(同図27・28)などが知られ、弥生時代における那珂川中流域での地域的有機性の追求が更に望まれる。

第3章　調査の記録

概要　対象地はほぼ南北にのびる舌状丘陵の北端部に近く、現況では東側が宅地・道路建設により断崖をなし、北側が大きく削平を受けていたため南半部および西側斜面を主要な調査区とした。

調査では丘陵尾根上で竪穴住居址2軒（SC01・02)、土壙3基（SX01～03）および南端部で小形のピット群を検出した。また西側の緩傾斜面で方形竪穴住居址1軒、掘立柱建物1棟、溝1条を検出した。このうち西側斜面の住居址、建物はいづれも地山整形による構築である。遺構は出土遺物が中期初頭～前葉のもので特に前後の時期を含まない点で比較的短期間の所産と考えられる。

1．SC01住居址（Fig.5・8・12、PL．2）

調査区中央より西側に下った位置で検出した。東西5.2m、南北4.5mの不整円形の竪穴住居址である。壁高は東側で40cm、西側で10cmと斜面下部で残りが悪い。床面は西側に差々傾斜気味である。主柱穴は精査したが検出できなかった。床面中央には、長・幅が60×50cm、深さ42cmの長方形ピットがあり、埋土には炭化物が多く混じっている。また周辺部は火を受け、焼土が散っている。これと連絡して西・北側に排水溝と考えられる幅10cm、深さ5cm程の小溝が走る。

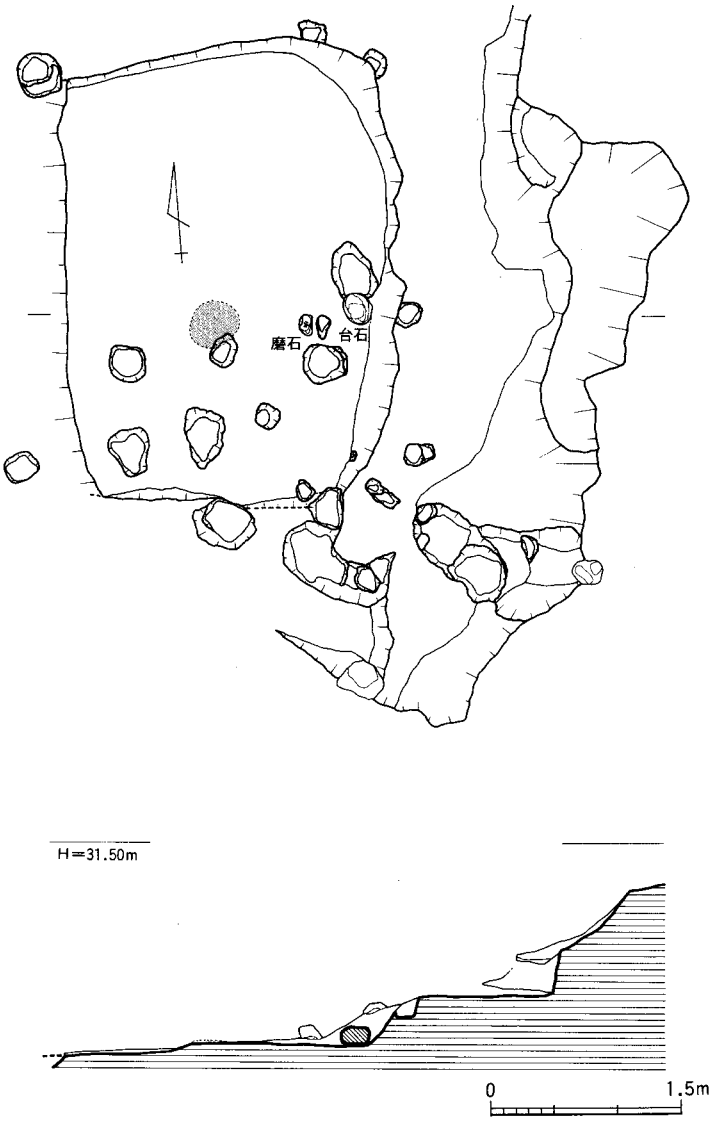


Fig.6 SC02住居址出土状況実測図(1/60)

出土遺物 (Fig.8・12 PL.4) 遺物の出土は極端に少なく、甕形土器口縁4点、東半側床面で石庖丁・扁平片刃石斧各1点、砥石、磨石、黒耀石剝片1点などである。**土器** (Fig.8) は、00002・00005がある。いづれも口縁端が短い、断面逆L字形を呈する。器色淡赤褐色を呈し、胎土密、焼成堅緻である。後者は口径28.4cm。**石器**(Fig.12)は、00006が方柱形の砥石で6面全てが砥面。000037は半月形石庖丁で、両刃、両面穿孔である。頁岩質砂岩か。00044は扁平片刃石斧で、頭部に打点を有する。長さ4.1cm、幅2.4cm、厚さ6mmをはかる。

2. SC02住居址 (Fig.6、PL.4・)

調査区西側緩斜面に位置する隅丸方形と考えられる住居址である。住居址東壁上方は、壁延

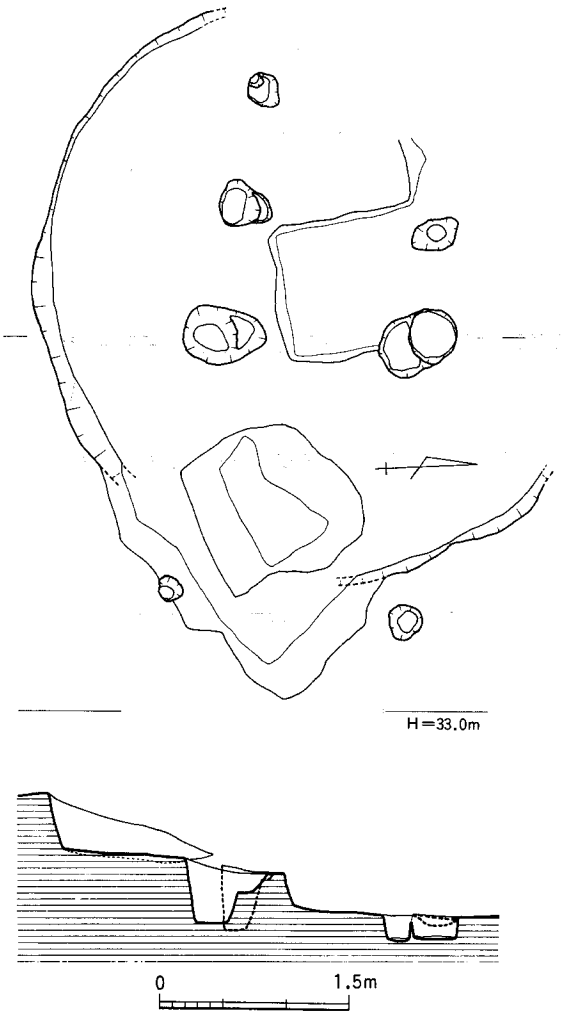


Fig.7 SC03住居址出土状況実測図(1/60)

長に平行して幅2m、比高差0.9～1mの斜面が形成されている。これは傾斜地における平坦面造成の作業と考えられる。住居址壁は東壁で3.9m、高さ30cmを残すが、他は西壁が傾斜地のため失なわれており、北壁2.4m、南壁1.9mを測る。

床面は西側に若干傾斜する。主柱穴は明確に規則性のある配列をもったものは認められず、径20～30cm、深さ10cm程度の柱穴が南側に認められた。またほぼ中央には炭化物を多く含む炉址があり、径40cm程度床面の花崗岩々盤が焼けている。東壁には壁面に接して径23cm程の花崗岩円礫が据えられ、周辺より石鎌・石庖丁製品破片がまとまって出土している点で工作台である可能性が高い。

出土遺物（Fig. 8・12、PL. 4）

土器（Fig. 8）は、甕形土器(00010・00018・00019)、器台(00009・00013)がある。00018・00019は床面出土で、口縁下に低い三角突帯を付すものと付かない甕とがある。器色は赤褐～暗赤褐色を呈し、胎土砂質で焼成軟質である。前者口径30cm、後者口径22.4cmをはかる。器台は裾部がひらく細身の形態で、器色赤褐色、胎土に粗砂の混入多し。焼成は軟質で底径9.5cm程度である。器面のあれが著しい。**石器**(Fig. 12)は、石庖丁(00017)、石鎌(00016・00038・00039)である。00017は背部を失ない、両刃で孔は片面穿孔である。石材は灰色砂岩質。石鎌はいづれも内弯刃の形式である。身幅は4cm程で、特に00039は基部を残し、幅4.5cm、刃部までの長さ5cmをはかり、背部に階段状剥離痕をのこす。石材は黄～淡黄色頁岩質である。

3．SC03住居址（Fig. 7）

調査区南側最頂部で検出された。東壁の一部と北側壁を失なうが、径4.6m程の円形をなす。

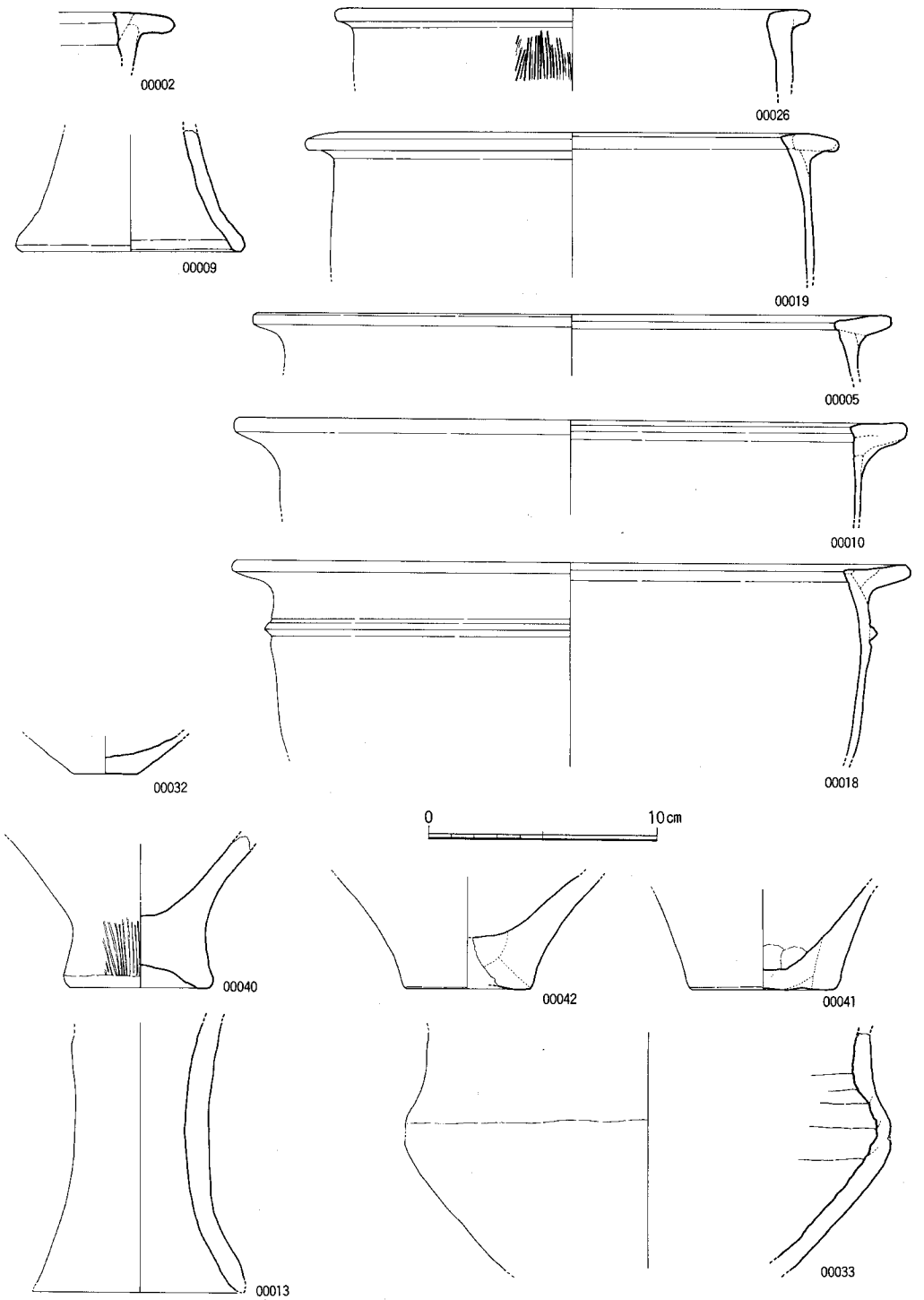


Fig.8 第3次調査出土土器実測図（1/3）

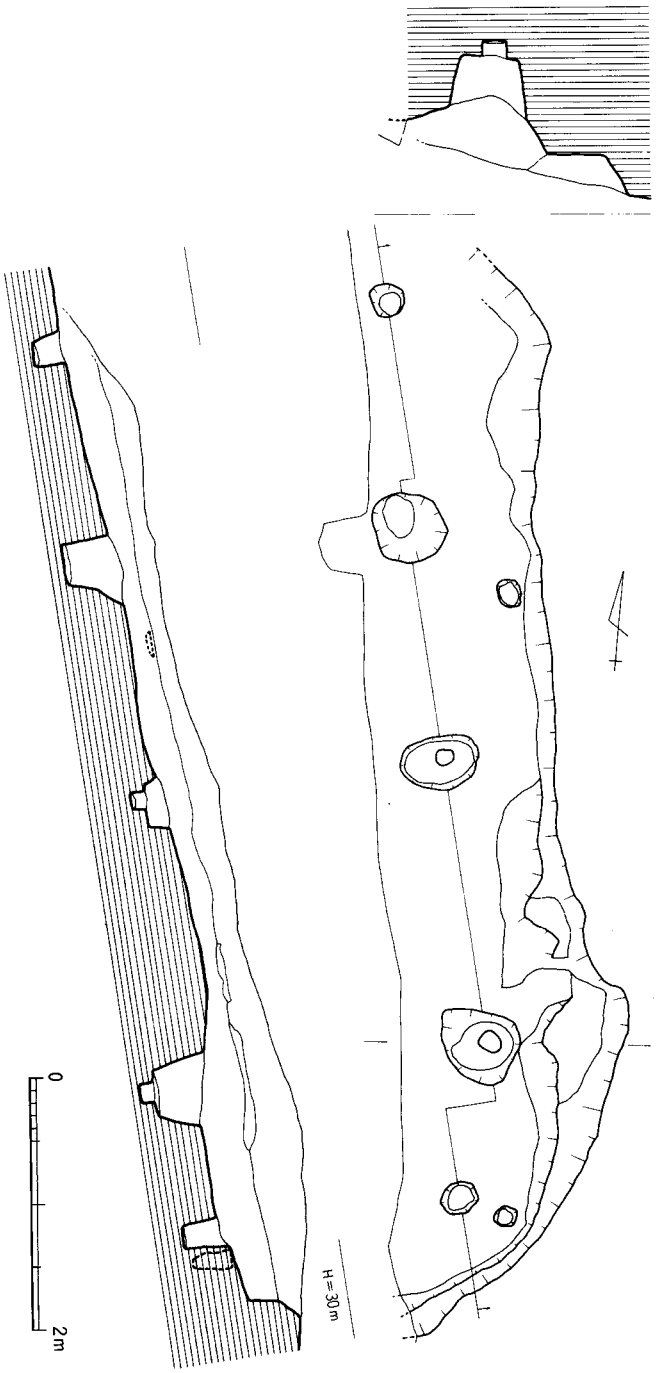


Fig.9 SB01建物出土状況実測図(1/60)

主柱穴は4本で、径40～60cm、深さ20～50cmをのこす。南壁で45cmの壁高をのこす。出土遺物は作図可能なものはない。

4．SB01掘立柱建物（Fig．9、PL．3）

調査区西側斜面で検出した。丘陵傾斜面と直交する南北方向に延長8.4m、比高差50～70cmの規模で緩いU字形に地山整形している。柱掘方は径50～60cm、柱痕跡は径15cm程度のものが2間分確認できる。柱間は2.3mをはかり、柱穴両端部にはそれぞれ1.2、1.6mの間隔で径30cm程の小柱穴が配置されている。更に西側斜面に規模確認のために3個のグリッドを設けたが確認できなかった。柱掘方、埋土からは遺物は出土しなかった。

5．SX01～03土壙（Fig．2・10・11）

SX01・02土壙　SC01住居址の埋土を切ってつくられている。長短辺が1.2×0.6m、深さ

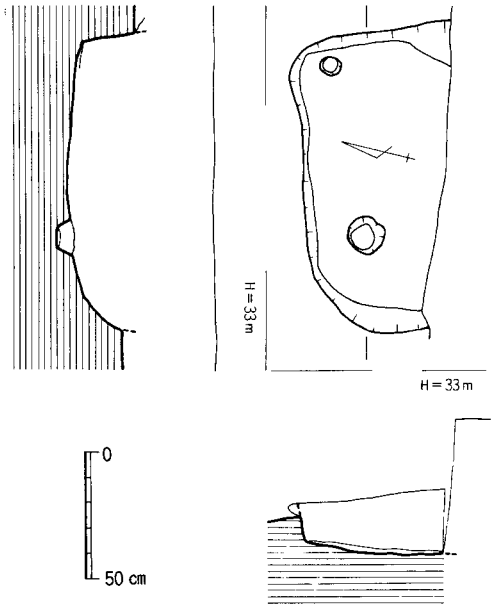


Fig.10 SX03竪穴出土状況実測図(1/30)

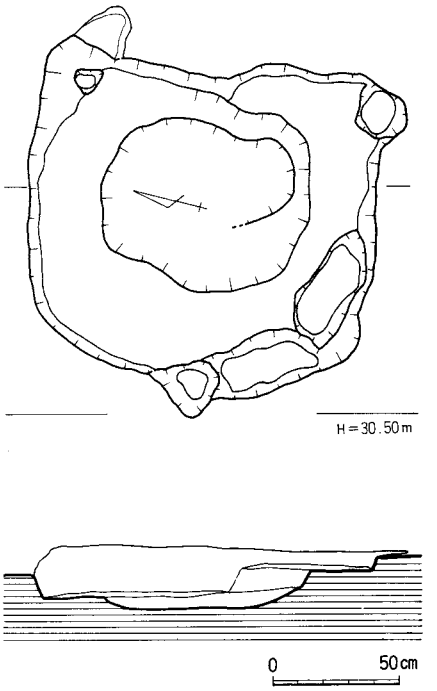


Fig.11 SX02竪穴出土状況実測図(1/30)

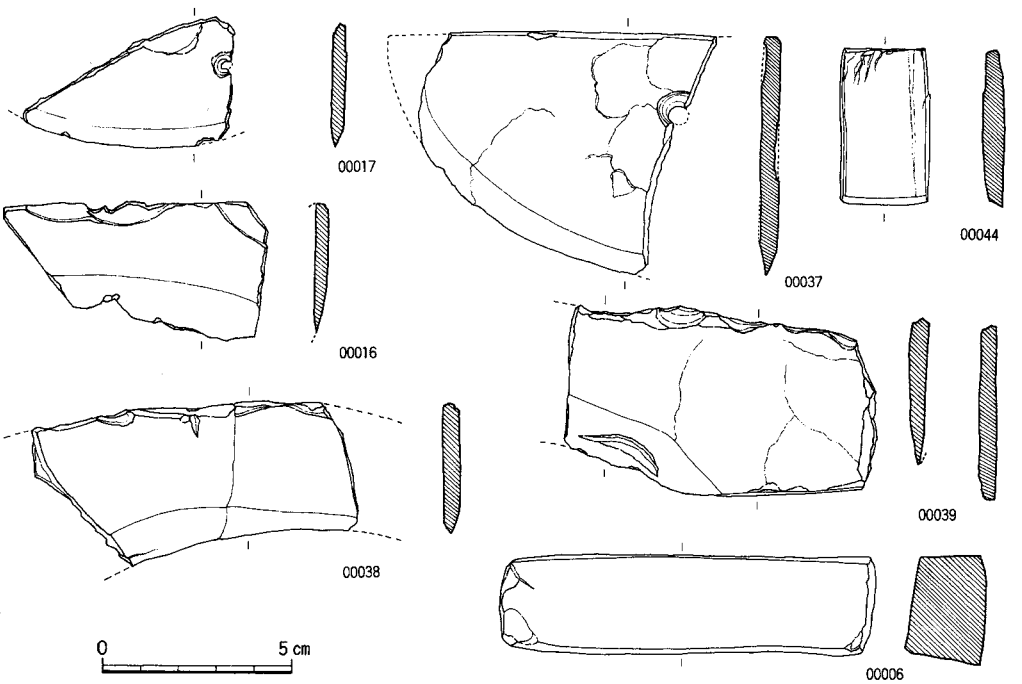


Fig.12 第3次調査出土石器実測図(1/2)

PL.1

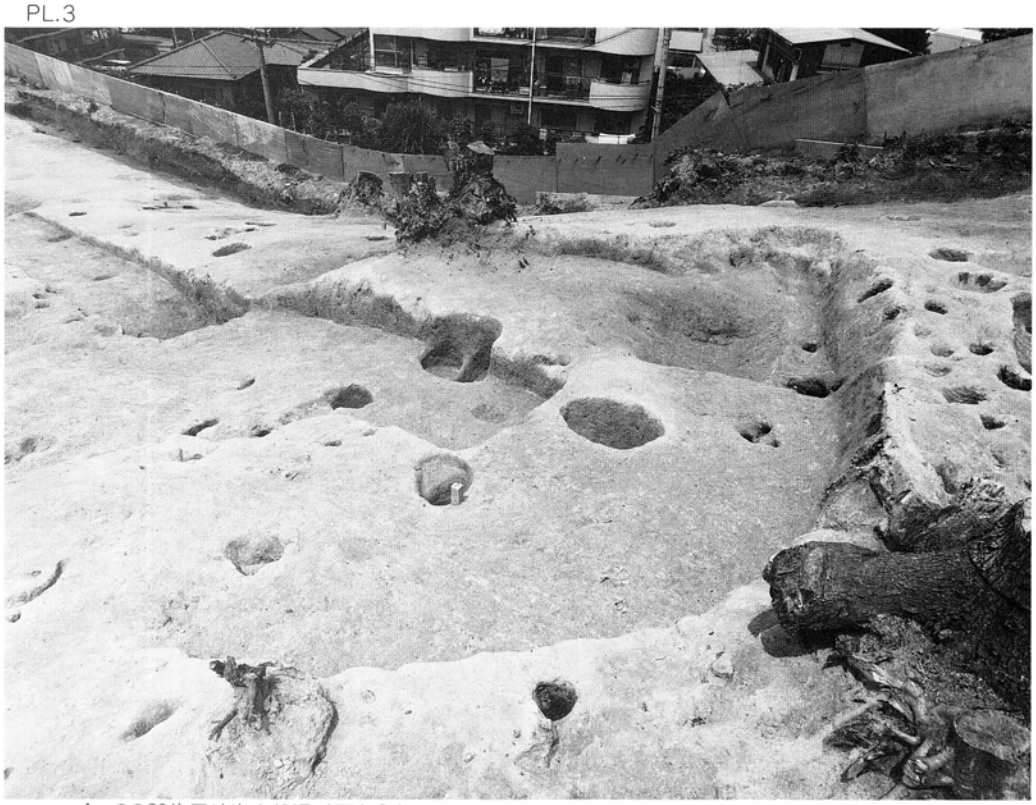
1. 調査区遠景（西から）

2. 調査作業風景（北から）

1. SC01住居址出土状況（北から）

2. SC02住居址出土状況（北から）

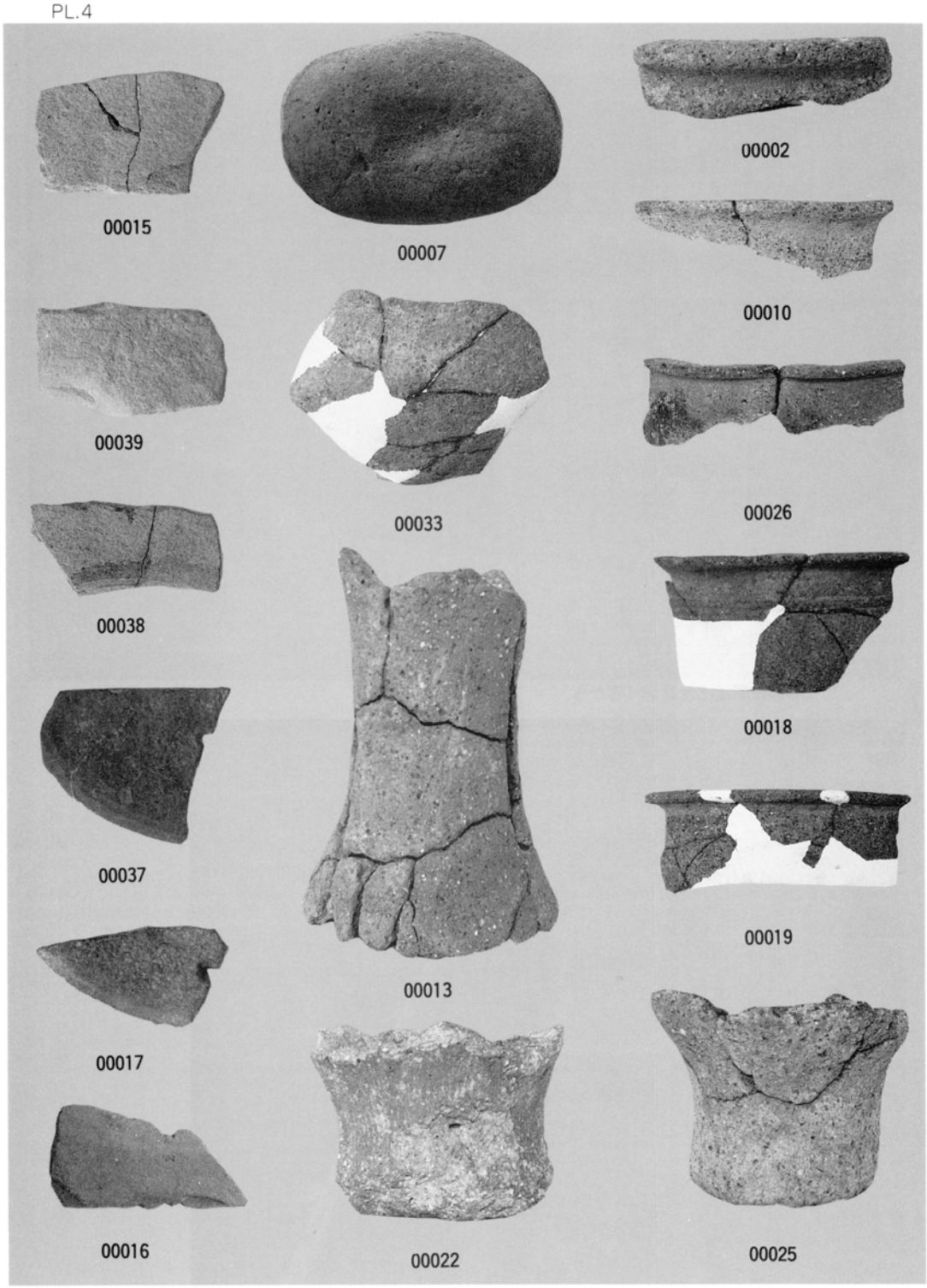
PL.3



1. SC03住居址出土状況（西から）

2. SB01掘立柱建物出土状況（北から）

PL.4


00015
00007
00002
00010
00039
00033
00026
00038
00018
00013
00037
00019
00017
00016
00022
00025

各遺構出土遺物

10cm程の規模の長方形を呈する。埋土は漆黒色砂質土で、遺物の出土はない。時期不詳である。ＳＸ02土壙は径1.3m程の不整円形で時期は不詳である。

ＳＸ03土壙　ＳＣ03住居址に南接する長方形土壙で、長幅が1.2×0.55m、深さ45cm以上である。埋土に炭化物を含み、生活遺構と考えられる。

６．ＳＤ01溝（Fig．２・８、PL．４）

調査区北西隅で検出した。延長6.5m、幅１～0.8mをはかり、深さ30～50cmで北西方向に流下する。

出土遺物（Fig．８）甕形土器00026は口縁端部の発達の弱い逆Ｌ字形口縁をもつ。器色黄褐色を呈し、胎土粗、焼成は軟質である。口径21cmをはかる。

７．表土出土の遺物（Fig．８、PL．４）

弥生式甕形土器（00040）、同壺形土器（00032・00041・00042）および縄文後期深鉢（00033）である。甕は底径6.6cmで、分厚いあげ底をなし中期初頭であろう。壺は大型のものが外底部がややあげ底気味となる。また00032は小型精成壺で、底径2.7cmをはかり、器色は黒色を呈する。

第４章　おわりに

これまで第３次調査で検出した遺構および出土遺物について略述した。今回調査の住居址３軒、掘立柱建物１棟および土壙・溝については時期決定に足る十分な遺物の出土がなかったが、僅少の特に甕形土器資料を比較すれば、ＳＣ01・03住居址が南側約20mにあった第２次調査時の竪穴住居址（長短径が7.26×7.02mの不整円形）と併行する時期の所産（中期前半）と考えられる。これよりやや下る時期の甕形土器を出土したＳＣ02住居址がこれに続く可能性がある。また時期不詳の掘立柱建物はいづれかの時期にともなう２×２間規模の高床式倉庫と考えられよう。それにしても本調査によって傾斜地の有効的利用の一端をうかがうことができ、これからの丘陵部調査に眼がむけられるべきこととなろう。

今回調査をもって野間Ｂ遺跡は殆で消滅したといえる。調査によって得られた成果と野間丘陵の緑の消滅の重さが問われよう。

野間Ｂ遺跡
福岡市埋蔵文化財調査報告　第231集
1990年3月31日
編集発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－15　電話（福岡）711－4667
印刷　秀巧社印刷株式会社

メ　モ